

「人文学」の可能

広瀬友久

人文学といった場合、普通考えられるものは、大学の人文学部あるいは文学部の諸学科である。しかしここで考える人文学は、そのような枠とは無関係である。それは一方では、従来人文科学と呼ばれて来たものの枠を超えて、数学や、自然を対象とした諸学ともかかわるであろう。あらゆる学問が人間の想像力の産物であり、人が文として表現しているものである以上、それは当然のことと考える。しかしその一方でそれは、いかなる既成の学問をも自明のものとはせず、その成り立ちそのものを問う姿勢をとり続けるであろう。どの学問にもせよ、もしそれがある一貫性をもって成り立ってしまったとき、そこで思考は停止する。閉じられた系の中で最も論理的に考えているとき、実は人間は何も考えていないのである。従って人文学は、およそ人間が思考するとしたらそこに成り立ち、思考するところではどこにでも成り立つとってよいのである。

既成の学問の諸分野、さらにいえば既成の言葉の意味の諸領域は、言葉以前の渾沌を差異化し、ある意味を限定するところに成り立っている。しかし人間がその一たん出来上った意味の網の目の中に捕捉されてしまったとき、人間は生きることを停止する。生きているのは人間ではなく、人間がこしらえてしまった得体の知れぬシステムである。もちろんこの時ほど人間が気楽でいられることもない。この時、模範解答は既に保証されており、誤る心配は全くないのであるから。それは模範解答の存在を疑わずにすすめることのできる受験勉強の気楽さと似ている。

模範解答の存在への幻想は、自然科学の分野に根強くあるようだ。それは客観性ということの神話がまだ生きているためであろう。対象である自然は、それを見る人間とは無関係に客観としてそれ本来の姿をもっており、あらゆる主観性を排除すればその本来の姿を知ることができ、それが客観的認識であるという神話である。しかしそのような客観性は、本当は自然科学においても意味を喪失しているのである。天動説と地動説のどち

らが宇宙本来の姿を表わしているというのか。対象を表象する段階で、もはや無前提ではあり得ない。結局すべては人間の思考法の問題であり、想像力の問題である、ということつまり言葉の問題であることになるのである。

あらゆる学問、知識は虚構であり、何らかの前提の上に築かれている。しかし虚構は一たん成立すると虚構としての力をもつのであり、その前提を忘れさせ、自らが実体であるかのような幻想を生む。それは虚構が制度化したということであり、初めは人間に生きるための糧を与えるはずであったものが、いつの間にか人間に思考を、そして生きることをやめさせてしまったということなのである。そしてこのとき人文学は、その制度化した虚構の虚構性を、前提にまで立ち帰ることによって解明しようとするだろう。そうすることによってそれは、言葉の根源のところで人間の想像力を解き放つことになるであろう。

これはかつては宗教が果していたことであった。イエスは絶対者神に人々の目を向けることで、地上の価値を逆転させようとした。仏教は言語以前の渾沌に人を向き合わせることで、やはり人間の知識、価値を相対化した。今日、宗教が何らかの意味をもちうるとしたら、それはこの点においてのみであり、それ以外はしょせん処世術に過ぎないということになるだろう。また、かつて人文学が生き生きとしたイメージを喚起していた特権的ともいえる時代があった。古代のギリシャ・支那・インド、ルネサンスのヨーロッパ、江戸時代の日本などがそれであり、その時人間は根底から思考し、およそ人間の考えうるすべてを考え尽していたといってもよい。しかしそれらの発想の芽も、制度化された実利主義に摘み取られ、文明は終りを告げていったのである。

それにしても、いったい人文学は何の役に立つのか、といわれることであろう。なるほど人文学は石ころ一つ動かすこともできず、カンカラ一つ作ることもできない。それは何らの目に見える効用ももたらさない。しかしそもそも役に立つとはどういうことなのか。電話帳は確かに役に立つ。その有用性を嘲笑うことはあるまい。しかし電話帳は人を動かすことができるか。さらにいえば人を生かすことができるか。「役に立つ」とはそういうことなのである。

逆に人文学が役に立っているというような話があったら、警戒しなくてはならない。心理学を学んだおかげで、子供が非行に走るのを防ぐことが

できたという親があったとしよう。多分その場合には、その親が心理学を誤解していたか、その心理学がいいかげんなものであるかどちらかであろう。「非行が防げる方がいいに決まっているではないか。」と言われれば、その通りであると答えるしかない。しかし子供を非行から救いたい親には、心理学を学ぶより先にすることはいくらかでもあるはずである。だがまた、もしここで心理学を捨ててしまう人がいるとすれば、その人にはしよせん人文学に通ずる道はなかったのである。

ソクラテスは日々を、寝そべって青年達に語りかけることで過した。彼の根底からの問いかけに恐怖を覚えた当時のギリシャ人の大半は、そのような彼を役立たずで害毒のみを流す男とみた。彼を抹殺することはいともたやすいことであった。目に見えて役に立つことをしている人間ではなかったし、著作をしなかった彼のロゴスはその場で消えてゆくものであったから。しかし彼の語った言葉こそ、ギリシャ文明の文明としての到達点を示すものであったのであり、一方彼を抹殺したとき、ギリシャ文明は内からの解体を、つまりは文明としての存在意義の喪失を準備していたのであった。

このソクラテスと文明の関係は、およそ人文学というものの運命を象徴的に示している。文明がそれを支えている生き生きとした神話を、つまりは善き人間の原型的イメージを風化させてゆくにつれ、短期的に目に見える実利的効果のみが追求されるようになる。そのような効果を生まないものは切り捨てられる。実利主義者は実利主義の貫徹が、文明をそして自らを解体させるのだということには気づかず、自分は良いことをしていると信じ、善意に燃えている。制度化された善意ほど恐ろしいものはない。しかし逆説的に言うならば、このようなクリティカル（危機的）な状況においてこそ、クリティカル（批判的）な存在としての人文学がますます意味を鮮明に現わしてくることもなるのである。

一見互に何の関係もないような分野を、それも重箱の隅をつつくような微細な領域を扱うのもよいだろう。未完のものでもよいし、途中で挫折したものがそのままの姿で出てきてもよいだろう。しかし常に背後にはこのクリティカルな意識がなければならず、またそれが共有されていさえすれば、そこで人文学は可能となると信ずるのである。